

# JLTA Newsletter No. 52

## 日本言語テスト学会

### The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 52 発行代表者: 渡部良典 2022年(令和4年)5月31日発行

発行所: 日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局

〒036-8560 青森県弘前市文京町1

弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター

横内裕一郎研究室 TEL: 0172-36-2111(代表) e-mail: u16yoko@gmail.com URL: <http://jlta.ac>



\*\*\*\*\*

### 正しい自己評価・内省

古賀 功 (龍谷大学)

近年では、センター試験が廃止になり、民間試験導入案が出されたが見送られ、大学入学共通テストに移行し、さらにこのコロナ禍での受験と、大学生は様々なことに振り回され、混乱し、不安を感じていたと思います。このような状況を受験生や生徒自身が打開することは困難ですので、当然負の影響を及ぼしてしまいます。テスト不安とは、テストを受験する前にも喚起されてしまいますし、さらにテスト前の不安はテスト中の不安にも悪影響を与えてしまうと予想されます。つまり、テスト環境が不安定ならば、受験者自身も不安定になってしまうのは当然のことでしょう。将来、また民間試験を導入する案も再検討される可能性、コロナ禍での受験、冬季実施による交通の影響など様々な問題を解決し、安定したテスト環境を提供しなければ、正当な評価をすることはできないように感じます。

しかし、不安というものは環境のみに左右されるわけではありません。私は日本文化と不安感というのは、深く関連しているような気がします。日本人は謙虚であり、謙遜し、あまり目立たないように努めることが望まれている傾向にあります。この文化的な性格・行動といったものは、集団生活を重視する学校生活の中で強化されているように思います。同じ給食を食べ、同じ制服を着、集団登校・下校も珍しくはない光景です。集団から逸脱してはいけないという意識は、常に平凡であれという感覚と繋がり、たとえ優れていても有能感・自己効力感・自信といった感情は低く、反対に自分はいくらもできない・心配・不安だといった感情が高くなってしまっているのではないのでしょうか。実際、私自身の研究でも比較的に英語熟達度が高い学生でも、有能感が低く、不安が高い傾向にありました。このように考えると、日本人学習者は不利な環境下で英語を学んでいるとさえ思えてしまいます。

できるのに自信がないし不安に感じてしまう学習者に対して、私はいつも正しく自分自身を評価してもらいたいと願っています。その際に必要となるスキルが self-reflection ではないのでしょうか。私が留学した際、様々なクラスで self-reflection をする機会があったのですが、最初は何をすればよいのかも理解できませんでした。

Reflectionを辞書で調べ、内省を辞書で調べ、やっと自身の言動を評価・振り返ることだと知りました。そして、reflection papersを提出していたある時、先生から「改善点やこうすればよかったという点ばかり挙げられており、良かった点や長所が全く挙げられていない」と指摘されました。つまり私は内省という名の反省をしていたのです。おそらく文化的に日本人の多くが反省することには慣れていますが、正しい内省・reflectionをすることは苦手なのではないでしょうか。結果として、不安に感じ自信もなくなってしまっていると思います。自己を正しく評価し、内省するスキルは自然に獲得できるものではなく、ある程度の訓練が必要です。小学校や中学校の時から、正しい内省を訓練することができたら、将来生活が豊かになると思います。なぜなら誰しもが良いところ、できていること、できるであろうことを持っているからです。それをしっかり認識できれば自信を持って行動できるはずです。テストやパフォーマンスの評価ももちろん大切ですが、まずは自分自身を正しく評価できる能力を身につけていただきたいです。結果として、様々な困難も乗り越え、成長していくことができるのではないのでしょうか。

**Reports on  
The 24th Annual  
Conference of JLTA  
Sept. 4 (Sat) & 5 (Sun), 2021**

**Online (Zoom)**

Theme: Language Assessment  
and Evaluation in the Age  
of COVID-19

**Keynote Speech  
Japanese Language Testing in the  
United States: The Current Situation  
in Response to the COVID-19  
Pandemic and a Future Agenda**

**Kimi KONDO-BROWN  
(University of Hawai'i at Mānoa)**

第24回研究大会の基調講演は、ハワイ大学から近藤ブラウン教授をお招きし、米国における日本語テスト評価について、コロナ対応下の現状と今後の課題についてお話しいただいた。前半はコロナ対応下における日本語教育の評価について説明があった。昨年度米国でも、ほとんどの大学がコロナ対応のためオンライン授業へと移行した。今年度はワクチン接種率の上昇と共に対面授業への回帰が見られたが、デルタ株の広がりのため再びオンラインやハイブリッドでの授業が増えつつあるとのことであった。評価に関しては学期途中で評価基準を変えることは通常認められてなかったが、こうした状況下でより柔軟で思いやりのある評価が求められるようになっている。また、オンライン下での不正防止も課題となっており、一部の授業では資料持ち込み型の試験も実施されている。語学の評価ではテストだけに頼らない、より良い波及効果をもたらす評価の在り方が検討されている。学習者も評価に参加させる学習者主導型の評価や、コミュニケーション能力

の測定を意識したパフォーマンステストの実施を導入するようになってきている。質の高い評価と実用性のバランスを考えていくことが重要である。

後半は米国における日本語学習者の評価、日本語能力テストについての説明と課題提示が話の中心となった。現在米国には16万7千人と世界で3番目に多い日本語学習者がいる。彼らは外国語としての日本語（JFL）を学ぶ学習者と、家族の伝統としての日本語（JHL）の2つに大きく分けられる。JHLのほうがJFLより上位のクラスに配属される傾向にある。米国における日本語教育の中心を担うのは初等から高等までの公教育である。各教育機関がカリキュラム上で連携するために、CEFRを基にした「JF 日本語教育スタンダード」と全米外国語教育協会（ACTFL）が定めた10段階の言語能力基準が評価の基準として用いられている。どちらも目標基準を示したものであり、これに基づいた評価は絶対評価となるが、学校によっては成績インフレ（grade inflation）を避けるために相対評価を併用するところもあるとのことであった。

次に主な日本語能力テストの妥当性についての説明があった。一般によく使用されている「日本語熟達度テスト（JLPT）」は「課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測定する」ことが目的となっている。しかしこれは受容能力のみを測定する選択式テストであるため、その妥当性を疑問視する研究結果もある。口頭でのパフォーマンステスト等との関連妥当性を調査する必要があるだろう。もう一つよく使用されているテストがACTFLのOral Proficiency Interview（OPI）である。話者が10段階の熟達度のどこに到達しているかを、2名の採点者で評価するテストである。現在はオンラインで実施できるOPIcも使用されている。このテストも真正性や構成概念妥当性について検証の余地がある。また、大学入試等に使えるAdvanced Placementとしてカレッジ・ボードが主催するJapanese Language and Culture Examが

ある。これは日本語の4技能すべてをコンピュータ上で測定するテストで、学習者を5段階に弁別する。大学入学のためには3段階以上が必要である。結果は入学後の成績をかなり良く予測するとの評価もある。こうした日本語テストの課題は、いずれも妥当性を検証した研究が少ないことである。テストが出す情報の透明度を上げることが今後期待される。

コロナへの対応の中、日本語教育の評価も様々な影響を受けている。ニューノーマルへの対応として、何をどう評価するか、評価基準はどうあるべきか、学習者に役立つ評価とはどのようなものか、コストと時間のバランスをどうとるか、学生への援助をどうするかなどを課題として考えていかなければならない。

**報告者 笠原 究（北海道教育大学）**

### シンポジウム

**テーマ：ウィズコロナ時代の言語教育におけるデータ解析のアプローチ**

**コーディネーター：**

**渡部 倫子（広島大学）**

**パネリスト：**

**李 在鎬（早稲田大学）**

**石井 雄隆（千葉大学）**

**本間 宏利（釧路工業高等専門学校）**

本シンポジウムは、「ウィズコロナ時代の言語教育におけるデータ解析のアプローチ」と題し、コーディネーターである渡部倫子先生（広島大学）から、新型コロナウイルス感染を背景に、日本語教育・英語教育・自然言語処理など隣接分野間の交流の重要性を提起いただき、シンポジウムが開催された。

1人目のパネリストである李在鎬先生（早稲田大学）は、日本語教育における作文の自動評価についてご発表された。日本語教育における自動評価システムを概観した後に、学習者作文評価

システム研究のこれまでの歩み、李先生が開発された jWriter という日本語作文の到達度を自動評価するシステムの仕組み、これまでの運用についてご説明いただき、作文評価における人工知能の役割と可能性をご提示いただいた。

2人目の石井雄隆先生（千葉大学）は、学習ビッグデータを教育のために活用しようと分析する領域である、ラーニングアナリティクスについてご発表された。ラーニングアナリティクスの社会的背景や近年の動向、ラーニングアナリティクスによって実現可能となったことについてご説明いただく中で、これからの教育・学習・評価への活用の重要性を提起されていた。

3人目の本間宏利先生（釧路工業高等専門学校）は、自然言語処理の観点から日本語試験問題の自動生成についてご発表された。本間先生が開発された漢字の読み問題・書き問題や接続詞問題について、その概要や開発の手続きやシステムの運用、今後の課題についてご説明いただいた。特に、問題文の抽出や錯乱肢の生成について具体的な方法のご報告いただき、問題の自動生成のプロセスをご教示くださった。

発表後のディスカッションでは、パネリストの先生方と参加者の間で言語のデータ解析や自動評価・採点にまつわる話題について様々な議論が交わされた。その中でも、機械による自動評価・採点の役割と人による評価・採点の役割に関する議論が特に印象的だった。それぞれ研究バックグラウンドが異なる中でも大局的には共通の認識を持っていて、機械がより優れている領域と人がより優れている領域を明確に区別して評価を捉えている点に納得できたところであった。また、個人的な興味としても、「人にしかできない評価とは何か」について考えを深める良い機会となった。

社会の ICT 化のみならず、新型コロナウイルスの影響もあり、教育や評価を取り巻く環境が大きく変革していく中で、本シンポジウムのテーマの中心であったデータ解析のアプローチは非常に重要で、

今後の基盤となっていくとだろうと再認識できた。未筆ではあるが、このような非常に有益な機会を提供してくださった、コーディネーター・パネリストの先生方、本研究大会の開催に関わる全ての方々にこの場を借りて感謝申し上げたい。

**報告者 久保田 恵佑（福島県立医科大学）**

## 大会の印象

**古賀 功（龍谷大学）**

数日間雨が続きあまり気分も晴れない状況でしたが、今朝は太陽が照りつけている中での JLTA の全国研究大会が始まった。コロナが蔓延している現状であるため、大会がオンライン開催ではあったものの、約 90 名が基調講演に参加しており、最後のシンポジウムでも 80 名を超える参加者がおり、対面での開催の時よりも滞在する参加者数は高かったような気がする。会場に行く手間もなく、自宅で気軽に参加できるのはオンライン開催の利点であったのかもしれない。しかし、数回大会に参加させていただいた対面開催の際には、発表者と参加者で白熱した質疑応答がみられたが、オンラインではそれがみられず、少々物足りなさも感じてしまった。

本大会では、日本語教育に関する発表を聞くことができた。学部時代には日本語教育が Major で ESL が Minor であったので、今回の大会は自分にとって非常に興味深く感じた。日本では英語教育が主流になってしまっているが、言語教育という大きな枠組みで様々なことを学ぶことの大切さを教えてくれたのではないだろうか。さらに、AI を使用しての教育・評価といったテーマも今後さらに重要になることが予想されるが、人間と AI がいかに共存し、よりよい教育を提供できるのかが今後の課題なのかも

しれない。最後にこれはオンライン開催の利点なのかもしれないが、本大会では海外からの発表もいくつかあり、国際学会に参加したような気分も味わえた。来年度、もしくは再来年からは、対面で開催されることに期待を持ちつつ、新鮮かつ有意義な大会に参加できたことに感謝していると同時に、本大会にご参加・ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

**Report on  
JLTA Workshop  
Sept. 4 (Sat), 2021**

**Online (Zoom)**

**「自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際」  
胡子 美由紀（広島市立古田中学校）**

第 24 回全国研究大会前日にオンラインにて、「自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際」というテーマでワークショップが行われた。中学・高校・大学教員だけでなく、学生の参加も多岐みられ、合計 35 名を超える参加人数になった。講師である広島市立古田中学校で教鞭をとる胡子美由紀先生は、何と小学校から始めた水泳で大学 4 年の時にインカレにも出場したご経験の持ち主で、自立学習には不可欠な「継続は力なり」という考えを実行されている先生である。ワークショップでは、先生が教師-生徒、生徒-生徒とのインターアクションを大切にされていることから、様々な機会がオンラインでありながらも参加者同士で交流することができ、加え授業実践・教室風景、またその背景に

ある先生のお考えをお聞きすることができ、非常に充実したものであった。

はじめに、どのような授業が理想的かを考えるために行った活動では、共通点を見つけるために様々な質問を作成するものであり、実際には個人的な情報を他の生徒と共有し、共通点を見つけ、生徒同士がお互いに関心も持ち、より良い教室環境を構築することができる。結果、「深い児童理解」が生まれるのである。現在では人間形成的英語教育が重要視され、人間力、言語力、行動力を向上させ、責任感のある生徒の育成が望まれている。

次に、生徒の脳を活性化する必要性が提案された。これは 4 技能に関連した短時間の活動を何度も繰り返すことによって、行動が習慣化され、素早い応答が可能になる。ここで実際に行った voice training や number counting は非常に効果的であり、私自身も学生に試してみようと思った。ここで先生が教えた中学 3 年の生徒のプレゼンテーションを見ることができた。この生徒はまず用意した英語教育のテーマで発表し、その後即興の質疑応答まですべて英語で行うことができていた。既習の単語をしっかりとアウトプットまでつなげており、自らの考えをすぐに表現できる能力があることに驚かされた。さらに、クラスメイトはこの生徒が発表している最中にも、うなずいたり、sure / right、など彼・彼女らの理解が見える形で表現していたことにも非常に驚かされた。このようなアットホームな環境では、不安も低下し、もっと何かを伝えたいという気分に生徒もなるだろう。

授業改善の点からも議論が膨らみ、現在ではより意味重視な言語活動が重要視されてはいるものの、実際には言語形式を重視する指導になっている。これを打破するには、素材研究・教材研究、指導法研究が必要であり、特に前 2 つの研究の重要

性が説かれた。最後にどのような活動が自立性を高めるかを議論し、明確な目標・興味・創造性・挑戦・達成感など計 10 個の要素を含む活動の作成が大切である。さらに、既習の内容をさらに発展させ、多様な見方や考え方ができるようにし、他者との意見の比較・分類、テーマを自分に身近なことだととらえさせ、それを通して言語能力が育成できる課題を考えることも重要である。教科書の内容を発展させ、水の問題や平和維持に関してグループでディスカッションしている生徒たちは、中学生とは思えないほど社会問題を真摯にとらえていることがわかり、衝撃を受けた。言語学習と共に様々な内容をより深く考察することによって、あらゆる視野を広げ、自己選択、判断、決定ができる自律した生徒を育成することが不可欠だ。最後に、「学ぶことは優しさで誠実さを身に着けること」という言葉で締めくくられた。

**報告者 古賀功（龍谷大学）**

**Report on  
The 53rd JLTA Research  
Seminar**

**Oct. 23 (Sat) ,2021**

**Online**

**「多様な発話の分析方法およびテスト検証  
への応用について」**

本会は 10月23日にオンラインで開催され、参加者は 18 名だった。副会長中村洋一先生の開会の辞の後、筆者から会の趣旨についての説明があり、続いて3つの講演が行われた。

1 つ目の講演は The University of Queensland の Noriko Iwashita 先生による「Textual analysis」であった。Iwashita 先生によると、テキスト分析へのアプローチは、結束性と一貫性の 2 つの側面から行うことが可能である。結束性は、文と文の間の構造上のつながりを指し、一貫性は、文脈上のテキストの属性であるとの説明の後、後者の概念には曖昧な部分があると指摘された。次に、Textual analysis を用いた妥当性検証の調査において、結束性と一貫性の特徴の出現頻度は、能力のレベル間に有意差がなかったものの、質的分析においてはレベル間に違いがあったことが紹介された。実際のデータを提示しながらの解説を通して、受験者の発話に関する理解が深まった。タスクによって、接続詞などの使用頻度の違いは見られなかったが、同じタスクタイプでも質問によって違いがあり、興味深い結果であった。どのように task comparability を確保するか、また、結束性と一貫性の評価をどのように行うべきかを考えさせられた。

続いて、The University of Bedfordshire (CRELLA) の Fumiyo Nakatsuhara 先生が「Functional analysis」をテーマに話された。Nakatsuhara 先生は、まず、タスク設定の妥当性と受験者の認知プロセスを調べるために、言語機能使用を確かめることの重要性を強調した。その後、機能使用を調べるためのツール (Language function checklist: O'Sullivan, Weir, & Saville, 2002)、およびそれを利用した調査結果が紹介された。タスクが引き出す言語機能はタスクタイプによって異なり、また、能力の高い受験者ほど、より幅広く高度な言語機能を使用する、といった直感と合致する結果であった。想定される言語機能使用と実際に使用される機能が一致するかを確認することの必要性への意識が高まった。

最後は、The University of Glasgow の Daniel M. K. Lam 先生による「Interactional analysis」であった。Lam 先生によると、インタラクション分析は、受験者の発話は話す相手とともに構築されるものであることを前提としており、相手によって発話内容がどのように変化するかを調べる分析手法である。現在では、レベル間やタスク間のインタラクションの特徴の解明、フィードバックの作成および採点者研修などに、徐々にその応用が広がつつあるとの紹介だった。筆者は会話分析に詳しくなかったが、ペアやグループ・ディスカッションの発話を深く理解するためには、重要な分析方法であると感じた。

それぞれの講演の最後に、実際のデータを使用した演習時間も設けられた。3 つの講演を通して、普段接する機会の少ない発話分析方法について新たな学びができ、大きな刺激となった。今後、これらの分析方法を、どのように調査に応用するかを考えさせられ、大変有意義な会であった。

**報告者 周育佳（東京外国語大学）**

**書評**  
**Article Reviews**

**『教育・心理系研究のための R によるデータ分析  
論文作成への理論と実践集』**  
**平井明代・岡秀亮・草薙邦広（編）**  
**2022 年 東京書籍**

本書は無料で使うことができる統計解析向けのプログラミング言語である R 言語について、英語教育研究の具体例を用いて解説している。同じく英語教育の例を用いて、APA スタイルに則った論文

の記載方法まで網羅している関連書籍の『教育・心理研究のためのデータ分析入門』では、統計に関する基本的な情報が丁寧に記載されているが、SPSS という有料の統計分析ツールを用いている。SPSS は数値を打ち込みマウスで直感的に分析できる反面、たとえば 3 水準以上のカテゴリカル変数を含む重回帰分析での dummy coding を sum coding や deviation coding にする際にはどのように設定すべきかを知りたい際には、マニュアルを熟読しなければならない。このように SPSS が行き先の決まったバスであるとすると、R はどこにでも自由に行ける自家用車のように例えられる。R は世界中の人々がパッケージを発展させているオープンソースであるため、上記の疑問への回答はネット上で見つけられる。さらに rmarkdown を OSF などで共有すれば再現性が担保されるだけでなく、共同研究の効率も高めることも可能である。

R はプログラミング言語ということで、初めての人には敷居が高く感じる。しかし本書では全 11 の章にて、インストールから機械学習まで豊富な具体例を R のコードと出力とともに記載しており、すんなりと R の使用に慣れることができる。英語教育の論文でよく見かける  $t$  検定 (3 章) や分散分析 (4~6 章)、相関分析 (7 章) といったパラメトリック検定に加え、データの正規性が満たされなかった場合のノンパラメトリック検定 (8 章) についても解説され、分析結果をどのように論文にて報告するかの記事もある。

本書は線形モデルの解説に加え、これらをベイズ統計でどのように R で分析するかについても各章ごとに記載がある (詳細は 2 章)。ベイズ統計の分析方法であるベイズ因子は  $p$  値による帰無仮説検定の代替法として用いられるようになっている。例えば Kim and Godfroid (2019) ではインプットのモダリティ (音声 vs. 文字) で文法知識に差がないかを確認するためにベイズ因子を用いている。これは  $p$  値が .05 よりも小さい場合には帰無仮説を棄却するのみであり、「音声と文字は同じ」とは言えないことに由来する。恥ずかしながら、私自身

はベイズ統計に関してはあまり詳しくないため、記載されているコードや論文への記載方法について読み込んで勉強していこうと考えている。

重回帰分析を始めとした線形モデリングでは、投入する説明変数が多すぎると問題がいくつか生じる（詳細は 9 章）。説明変数の数を減らす際には因子分析や主成分分析（10 章）が用いられることがあるが、1000 を超える膨大な量を人間が処理することは難しい。そこで機械学習の手法が解決策となりうる（11 章）。機械学習の分野では説明変数は特徴量と呼ばれ、膨大な数の特徴量から判別と回帰の分析が可能である。ただし、フローチャートのような視覚化が可能でビジネスの場面でも活用される決定機分析は過学習を起こしやすいため、近年ではバギングと呼ばれる手法を用いたランダムフォレストやブースティングを用いた XGBoost / LightGBM といった方法も注目されている。本書では決定木分析とランダムフォレストを紹介しており、英語教育への応用方法を示している。

本書は R を用いたデータ分析への入門だけでなく、ベイズ統計や機械学習といった手法についても扱っており、APA 7<sup>th</sup> に基づいた論文への記載方法までサポートされている。データ分析を行い、卒業論文や修士論文を執筆する学部生や大学院生には必携であると言える。実際に私も SPSS を用いて分析したデータを R で再分析しようとした際、ワイドフォーマットのファイルをロングフォーマットにするコード（第 1 章）に助けていただいた。本書は R を用いた分析への第 1 歩として様々な分野で参考となる書籍であると感じる。

#### 引用文献

Kim, K. M., & Godfroid, A. (2019). Should we listen or read? Modality effects in implicit and explicit knowledge. *The Modern Language Journal*, 103(3), 648-664.

<https://doi.org/10.1111/modl.12583>

評者：小室竜也  
(筑波大学大学院生)

## 2021 年度日本言語テスト学会

### 著作賞

### 受賞者から

### Message from the Recipient of The 2021 JLTA Best Book Award

受賞者 小泉 利恵 (清泉女子大学)

Rie Koizumi (Seisen University)

『英語 4 技能テストの選び方と使い方—妥当性の観点から—』(2018 年出版、アルク選書) に対し、日本言語テスト学会第 1 回著作賞をいただき、誠にありがとうございます。この本が完成し、受賞に至るまでには、大学院時代の指導教官の望月昭彦先生をはじめ、本書をご推薦くださった方、著作賞選考委員の方々、その他たくさんの方の応援やご助言をいただきました。さらに、アルクの南美穂、宮崎友里子、長谷川裕子、平野琢也様には、本の企画にご理解いただき、また引用文献を残したいなどのこちらの気持ちもくみつつ、一般の読者に理解しやすくするために、多くの修正案を粘り強く出してくださり、感謝の念に堪えません。

この本は、もともと「妥当性の概念とその検証の歴史と今後のあり方」についてまとめたいという気持ちと、大学入試の英語外部試験利用に関して、言語評価リテラシー向上の必要が求められ、「テストの選び方と使い方」を整理することで社会的なニーズに応えたいという気持ちを合わせて執筆したものです。「テスト選択・使用の悩みと誤解」、「妥当性理論と妥当性検証」、「4 技能テストの妥当性検証」、「テストを適切に選び、使う方法」の 4 章から



なっています。また、「4 技能テストの利点と欠点」「筆者の経験:言語テスト研究や妥当性に関して」「多様な妥当性の捉え方に関して」「4 技能テストが大学入試に導入されたときの波及効果の予測と、各利害関係者が取るべき行動」の4つのコラムも付けました。それぞれの詳細は本をお読みいただければと思います。また、本書の出版後にも、妥当性の概念をさらに整理し明確化した Chapelle (2021) や Chapelle and Voss (2021)、英米のテスト文化を超えて妥当性を捉えた Chalhoub-Deville and O'Sullivan (2020)、適用事例を通して、妥当性の捉え方のひとつである「社会・認知的枠組み」の具現化を示している Taylor and Saville (2020)、教室内の形成的評価における妥当性検証の推奨を明示した Gu (2020) 等、次々に新しい文献や資料が出ており、拙書が最新ではありませんが、最近までの流れの把握にお役にたてれば幸いです。

本への反応としては「筆者の経験:言語テスト研究や妥当性に関して」が最もあったように思います。ここでは、妥当性の概念を理解するのに長年かかったこと、それを振り返って考えたことを書きました。また、著者紹介で、私自身の記述とともに亡父母の作品の写真も掲載していただきました。個人的な面をある程度出しつつまとめたいと思ったのは、言語テスト研究・評価研究は難しいと思われがちで、量的と質的ともに深い観点がある中で、量的な分析にスポットライトが当たりがちで、難解で無機質な分野と思われることもあり、残念に思っていたことが1つの理由でした。

自分自身、修士の院生としてほぼ白紙状態から言語テスト研究・評価研究を学ぶにあたり、わからないことが多くて疑問だらけのときに、学会でお会いした先生方の優しさや言葉に励まされてきました。例えば、修士1年次に筑波で開かれた Language Testing Research Colloquium (LTRC 1999) で、Lyle F. Bachman 先生にお願いして一緒に撮らせていただいた写真が、

*Fundamental considerations in language testing* (1990, Oxford University Press) を読んでくじけそうになっていたときの私のお守りになりました。同じ LTRC では、Glenn Fulcher 先生や、当時お元気でいらした Caroline Clapham 先生にテーマについて、詳細にご助言いただきました。またその後の LTRC では、Carol A. Chapelle 先生が妥当性の発表をなさるたびに、前回のモデルとの違いやその根拠などを細かく質問させていただいて、先生はそれに親切に答えてくださいました。日本の言語テスト界の創始者であり、2021年にお亡くなりになった大友賢二先生からも、お目にかかるたびに励ましのお言葉をいただきました。また大友先生のゼミなどで言語テスト研究・評価研究を学ばれた方々から、この分野に入ったきっかけは先生のお人柄にひかれてだったと伺っています。研究分野は、学問として魅力とともに、人とのつながりによって深まる側面もあるように思います。拙書がどの程度それに貢献できたかはわかりませんが、まだまだ日本や世界の中でマイナーな分野である言語テスト研究・評価研究を盛り立てていければいいなと思っています。

一部内容が重複しますが、2021年9月の授賞式でのスピーチ（若干修正あり）を以下挙げさせていただきます。

It's my honor to receive the first JLTA Best Book Award for my book, titled *How to select and use four-skill English tests from validity perspectives* 『英語4技能テストの選び方と使い方—妥当性の観点から—』, written in Japanese (2018, ALC Press).

This book consists of 4 chapters: worries and misconceptions for test selection and use; validity theory and validation, validation of four-skill tests; and how we can appropriately select and use tests. Initially I simply wanted to write a book on validity and validation

and language assessment literacy. But as discussions became active on whether four-skill English tests should be used or not in university entrance examinations, I shifted my focus on how to select and use tests using validity theory perspectives. Luckily some researchers cited my work in their discussions, and I felt I was able to contribute to the discussions and enhancement of language assessment literacy, to some extent. After my book was published in 2018, more publication related to validity and validation has appeared, such as Chapelle (2021), Chapelle and Voss (2021), Chalhoub-Deville and O'Sullivan (2020), Taylor and Saville (2020), and Gu (2021). Thus, my book is not up to date anymore in terms of validity, but it might be helpful for those who want to learn the history up to around 2018.

I would like to express my appreciation to many people who supported me. My supervisor Akihiko Mochizuki introduced me to interesting worlds of validity in my master's and doctoral courses. My colleagues and friends who encouraged me to pursue my interests in my research and language testing and assessment. I am also grateful to editors Miho Minami, Yuriko Miyazaki, Yuko Hasegawa, and Takuya Hirano, at ALC Press for helping me publish this book. Thanks to their precious, honest feedback I could modify my Japanese expressions so that my intended readers could better understand my messages.

I would also like to mention my family, particularly, my father and my mother, who passed away before this publication. As I showed her work in my book, my mother liked to create artwork using pressed flowers and help elderly people living alone in the neighborhood. My father used to grow flowers including chrysanthemum and donated pot flowers to schools. I learned from them the importance of being patient and finding small things I can do for nearby environments and the society. They did not understand my passion for language assessment but regarded my academic work and research as precious. Furthermore, my thanks go to my husband, Yo In'nami, who assisted me as a research partner and a life partner. I concentrated on writing this book for a month. During that period, he didn't complain at all about poor meals and a bright room all night long. He even read the book and gave me good feedback.

Last but not least, I am thankful to those who recommended my book to the award committee, the book award committee members who selected my book, and the JLTA members who supported JLTA's activities. I am determined to work harder to contribute to language assessment research and practices, as a recipient of this important award.

#### 引用文献・References

Chalhoub-Deville, M., & O'Sullivan, B. (2020). *Validity: Theoretical*

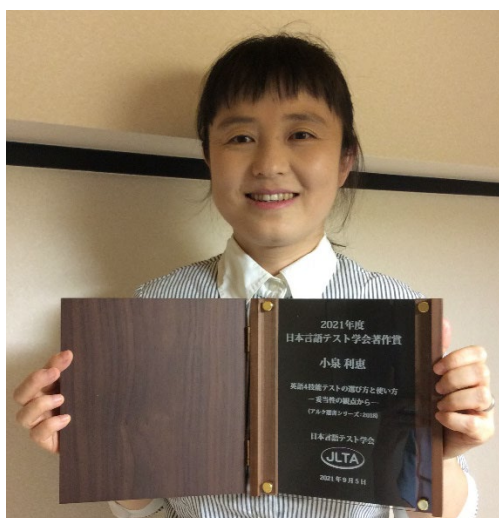
development and integrated arguments. Equinox. (see also <https://www.youtube.com/watch?v=Iy4DwaiQXEQ&t=19s>)

Chapelle, C. A. (2021). *Argument-based validation in testing and assessment*. SAGE.

Chapelle, C. A., & Voss, E. (Eds.) (2021). *Validity argument in language testing: Case studies of validation research*. Cambridge University Press.

Gu, P. Y. (2021). An argument-based framework for validating formative assessment in the classroom. *Frontiers in Education*, 6, 1–10. <https://doi.org/10.3389/feduc.2021.605999> (see also <https://www.youtube.com/watch?v=EHxULkiVC9I&t=14s>)

Taylor, L., & Saville, N. (Eds.). (2020). *Lessons and legacy: A tribute to Professor Cyril J Weir (1950–2018)*. Cambridge University Press.



## JLTA 事務局より連絡 Messages from JLTA Secretariat

JLTAの活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

(1) 2022年度の全国研究大会は、オンラインで開催させていただく予定です。開催日は11月5日(土)ー6日(日)を想定し、調整を進めておりますが、変更となる可能性もございます。大会テーマ、基調講演者、並びに発表申し込みについては今後学会HP、メール、Twitter等を通じてご連絡差し上げます。大会の詳細が決まり次第、参加申込みの方法をお知らせいたします。最新情報は、以下からご確認ください。  
[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18)

Twitter: @JLTA\_official

(2) 2021年10月23日(土)に第53回JLTA研究例会がオンライン形式にて開催されました(ZOOM使用)。別項でレビュー頂いている通り、発話の分析方法について3名の先生方に講演いただきました。また、第54回研究例会が感染症対策をとった上で対面形式で2022年3月30日に都内で開催されました。

(3) 『**日本語テスト学会誌**』第24号がお手元に届いたところかと存じます。例年より発行に時間がかかったことについてお詫び申し上げます。今号からは冊子版の配送とほぼ同時期にJ-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>)にて公開しています。バックナンバーを含め、ぜひご覧ください。

『**日本語テスト学会誌**』は、狭義のテストに関するものだけでなく、広く評価に関する論文を募集しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど、評価全般に関わる実験・知見を含みますので、どうぞふってご応募ください。

日本語テスト学会では、2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入しました。このシステムは、2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので、投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに、学会誌の一層の質の向上を目指して、既出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や、著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行います。2021 年度もこのシステムを使って投稿を受け付けます。詳細は、次の通りです。

### オンライン投稿審査システムに関する詳細

#### 1. システムのウェブサイト

<https://iap-jp.org/jlta/journal/login>

#### 2. 投稿期間

2022 年 4 月 7 日～2022 年 5 月 7 日  
お知らせが遅くなり申し訳ございません。ご投稿いただいた論文については現在審査を進めております。

#### 3. 学会誌執筆要領・テンプレート

本システムの導入等により一部変更があります。最新の執筆要領やテンプレートをご参照ください。

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62)

#### 4. 問い合わせ先

日本語テスト学会誌 編集事務局

[jlta-edit@bunken.co.jp](mailto:jlta-edit@bunken.co.jp)

(4) **JLTA 研修講師派遣事業**が 2017 年度から始まりました。本事業は、テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。JLTA 研修講師派遣委員会を中心に進めまして、2021 年度は新型コロナウイルス感染症の影響か、申し込みがありませんでした。会員の皆様におかれましては、言語テストにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。

ウェブサイト：<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

(5) 本学会ウェブサイトには、Web 公開委員会が公開を進めてくださった、**チュートリアルとワークショップ・ビデオ**があります。どうぞご活用ください。

### WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

#### チュートリアル (Tutorial, 日本語)

- ・「よい」テストの条件 (What is a 'good' test?: validity, reliability, and practicality)
- ・テストの構成概念 (The concept of test constructs)
- ・テスト細目 (Test Specification)
- ・リーディングテスト (Testing Reading-6 basic test formats-)
- ・リスニングテスト (Testing Listening)
- ・ライティングテスト (Testing Writing)
- ・スピーキングテスト (Testing Speaking)
- ・語彙・文法テスト (Testing Vocabulary & Grammar)
- ・測定の標準誤差 (Standard Errors of Measurement)
- ・効果量とは? (What is the 'Effect Size'?)
- ・学習に役立つテスト結果の報告 (Test

- result reporting to enhance learning)
- ・古典的テスト理論 (Classical Test Theory)
- ・確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis)
- ・メタ分析 (Meta-Analysis)
- ・質的方法 (Qualitative Methods)

- 2019
- ・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用 (前半)
- ・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用 (後半)
- ・配布資料

#### ワークショップ・ビデオ (主に日本語)

- 2014
- ・Workshop 1 – CAT の基本的な考え方 (スライド)
- ・Workshop 2 – J-CAT (スライド 1, スライド 2, スライド 3)
- 2015
- ・Workshop 1 – テストデータ分析入門 (in English)
- ・Workshop 2-1 – 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方—妥当性と信頼性に留意して (スライド)
- ・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (スライド)
- 2016
- ・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量—入門編 (スライド)
- ・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量—理論編 (スライド)
- ・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量—実践編 (スライド)
- 2017
- ・Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

#### (6) JLTA 最優秀論文賞

2021 年度の最優秀論文賞は以下の通りに決定しました。

著者 : David Allen, Tatsuro Tahara (敬称略)

タイトル : A Review of Washback Research in Japan

該当ページ : JLTA Journal, 24, pp. 3-22

おめでとうございます。受賞者からのコメントは次号の JLTA Newsletter にてお届けする予定です。

#### (7) JLTA 著作賞の推薦について

JLTA では 2020 年度より「JLTA 著作賞」の表彰を行っています。推薦図書がある場合は、以下のページにある規程・テンプレートをご確認・ご記入の上、著作賞選考委員長へ送付ください。送付先につきましても、以下リンクをご参照ください。

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=1618](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618)

#### (8) 2021 年度 JLTA 著作賞受賞者

2021 年度 (第 1 回) の JLTA 著作賞受賞者は前記の通り、小泉利恵先生 (清泉女子大学) の『英語 4 技能テストの選び方と使い方—妥当性の観点から—』(2018 年出版、アルク選書) に決定し、2021 年度の研究大会で授賞式が執り行われました。

## (9) その他

- 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ（<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>）」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください（<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>）。マイページ内の会員向けページにおいて、ジャーナル・ニュースレター等の掲載があります。
- 所属や書類発送先など登録情報に変更がある場合、マイページでの登録情報の変更を3月末までにお願いたします。学生会員の方には、毎年学生証のコピーをご提出いただいています。
- 2020・2021年度の会費振込について、これからの方は早急によるしくお願いたします。2021年度分のお支払いがない場合には、2022年4月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり、マイページの使用もできなくなります。
- 本会の退会を希望される方は、事務局（[jlta-post@bunken.co.jp](mailto:jlta-post@bunken.co.jp)）へご連絡をお願いたします。

### 連絡先変更

文責：

JLTA 事務局長 横内裕一郎（弘前大学）

JLTA 事務局次長 久保田 恵佑（福島県立医科大学）

藤田亮子（順天堂大学）

前田啓貴（松山大学）

日本言語テスト学会（JLTA）公式

Twitter アカウント: @JLTA\_official

[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

## Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you have. Also, please see our English website for more details:

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=599](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599)

(1) We apologize for not sending the *JLTA Newsletter* issue sooner. This is due to delays in the secretariat's work.

(2) **The 25th JLTA Annual Conference** is scheduled to be held online November 5 (Sat) – 6 (Sun). The conference's theme, keynote speakers, and presentation registration will be announced via the JLTA website, e-mail, and Twitter. The attendee registration procedure will be announced later, around the end of July or the beginning of August. We plan to use PayPal to collect all registration fees. We will advise when details are finalized. The latest information can be found at [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18) or on the official Twitter account (@JLTA\_official).

(3) The 53rd JLTA meeting was held online (via Zoom) on Saturday, October 23, 2021. As reviewed in another section, three instructors gave lectures on how to analyze utterances. The 54th JLTA meeting

was held in person in Tokyo on March 30, 2022. Measures against COVID were taken. To review the slides used in both meetings, see [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=21](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21)

(4) **The *JLTA Journal* (vol. 24)** was published and sent to members' registered postal addresses last January. Previous volumes were uploaded onto J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>). The latest volume (vol. 24) was added.

**The *JLTA Journal* invites various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense**, such as classroom-based practice and program assessment that dealing with issues and topics on testing and assessment.

(5) We introduced an "Online Submission and Review System" from the academic year 2019. This system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA's administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the JLTA Journal's quality, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a

database of published articles and for anonymity using human resources.

### **Details about JLTA Online Submission and Review System**

#### 1. Website

<https://iap-jp.org/jlta/journal/login>

#### 2. Submission period in 2022

We only accepted submissions during the following period:  
April 7, 2022 to May 7, 2022

We apologize for the late notice.

#### 3. The Guidelines for Contributors and Templates

The Guidelines for Contributors to the *JLTA Journal* and Templates have been revised due to the introduction of the system and other changes. Please see and follow the latest guidelines and templates before submission, which are located at: [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62) for details.

#### 4. Contact information of the JLTA editing office: [jlta-edit@bunken.co.jp](mailto:jlta-edit@bunken.co.jp)

(6) We have been working on the **JLTA Training Lecturer Dispatch project** since 2017, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations wanting to hold a training session or meeting on test

development and use. Thanks to the efforts of the JLTA Training Lecturer Dispatch Committee, one academic society used this system to dispatch a lecturer to its meeting during the 2020 academic year. Please feel free to convey this information to those who may be interested.

Website:

<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

(7) JLTA determines a winner for **the JLTA Best Paper award** chosen from papers published in the latest issue of the *JLTA Journal*. The award is conferred at the annual conference in the following year. We are pleased to announce the award recipient for the 2021 JLTA Best Paper Award.

**Authors:** David Allen, Tatsuro Tahara

**Title:** A Review of Washback Research in Japan

**Location:** JLTA Journal, vol. 24, pp. 3-22.

#### **(8) 2021 JLTA Best Book Award**

The recipient of the 2021 (1st) JLTA Book Award is Professor Rie Koizumi (Seisen University), "How to Select and Use the English 4 Skills Test-From the Viewpoint of Validity-" (2018, ALC). The award ceremony was held at the 2021 JLTA Annual Conference.

#### **(9) Other information**

- Have you visited the "My Page" site

(<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>), where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact us (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>) if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access recent *JLTA Journals*, previous newsletters, and other materials specifically for members on the "My Page" site.

- If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on "My Page" by the end of March. We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.

- If you have not yet paid the yearly membership fee for 2020 and 2021, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2021, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the "My Page" site after April 2022.

- If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to [jlta-post@bunken.co.jp](mailto:jlta-post@bunken.co.jp)

**JLTA Secretary General**  
**Yuichiro YOKOUCHI**  
**(Hirosaki University)**

**JLTA Vice Secretary General**



**Keisuke KUBOTA (Fukushima Medical  
University)**  
**Ryoko FUJITA (Juntendo University)**  
**Hiroki MAEDA (Matsuyama University)**

JLTA Official Twitter account:

@JLTA\_official

[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)



日本言語テスト学会事務局  
〒036-8560 青森県弘前市文京町1  
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践セ  
ンター  
横内裕一郎研究室(郵送時には必ず研究室  
名を明記してください)  
TEL: 0172-36-2111(代表)  
e-mail: u16yoko@gmail.com  
URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会  
委員長 古賀功 (龍谷大学)  
副委員長 土平泰子 (聖徳大学)

委員  
笠原究 (北海道教育大学旭川校)  
長沼君主 (東海大学)  
宮崎啓 (東海大学)